

スタチン系と薬物治療

いるか薬局 実習生

大阪大谷大学 京谷愛珠

脳梗塞や心筋梗塞の要因である動脈硬化を抑える上で脂質異常症の治療は重要であると学び、その薬物治療について深く理解したいと思いました

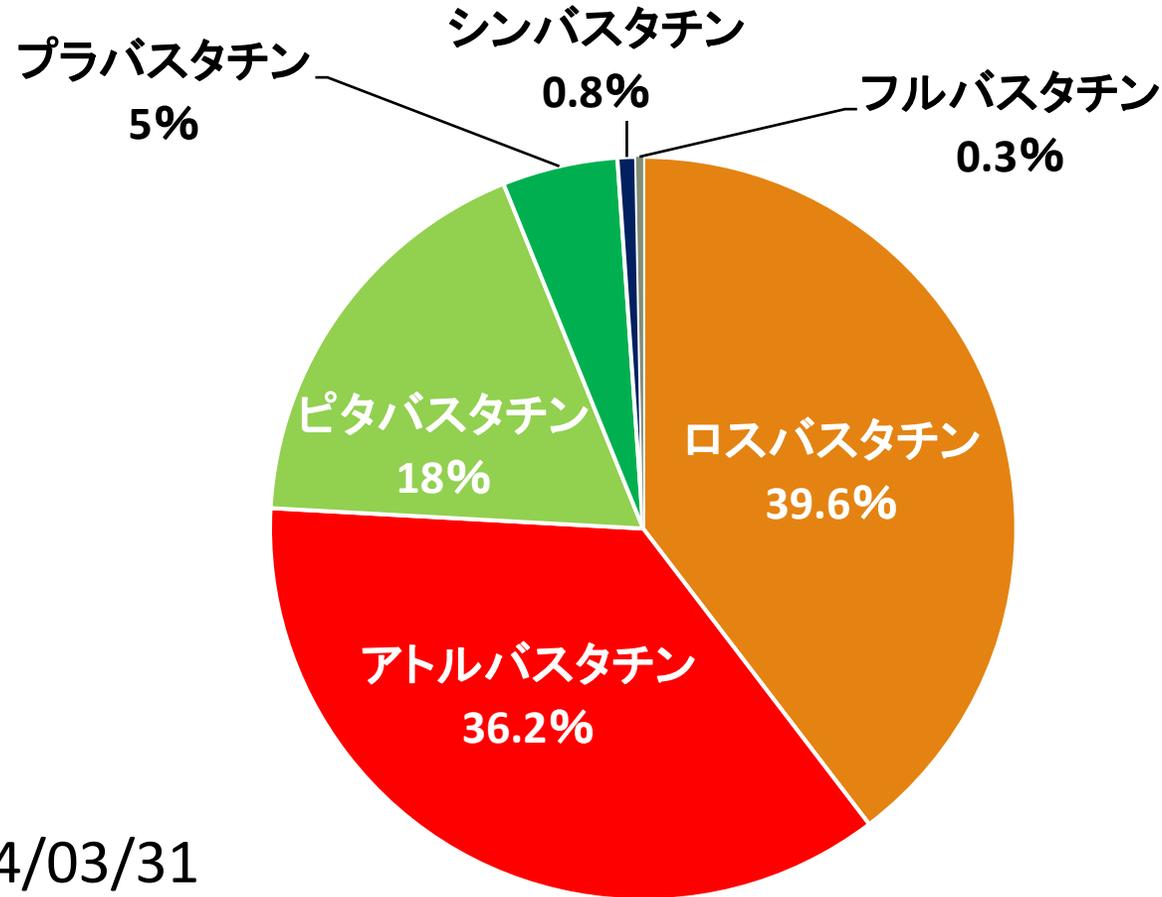
今回は脂質異常症の治療薬として広く用いられているスタチン系に着目しました

スタチン系について

薬剤名	性質	特徴
プラバスタチン	水溶性	細粒剤がある
シンバスタチン	脂溶性	アゾール系抗真菌薬が併用禁忌
フルバスタチン	脂溶性	夕食後に服用する
アトルバスタチン	脂溶性	配合剤の種類が多い
ピタバスタチン	脂溶性	シクロスポリンは併用禁忌
ロスバスタチン	水溶性	他の医薬品との相互作用が少ない

実習中によく用いられているスタチン系があることに気づき、その理由を考察するために、実習先の薬局でどのような使用内訳でスタチン系が調剤されているかを調べました

過去三か月間のスタチン系の使用内訳



2024/01/01～2024/03/31

※配合錠を含む

考察

ストロングスタチンに分類されているスタチン系（アトルバスタチン、ピタバスタチン、ロスバスタチン）が使用内訳全体の9割を占めていました

ストロングスタチンのLDLコレステロール値低下率は30～50%とされており、LDLコレステロール値低下量の多い**ストロングスタチン**を用いることで、脳心血管イベント発症率の低下につながるということが動脈硬化性疾患予防ガイドラインで示されています
そのため、**ストロングスタチン**はよく選択されているのではないかと考えました

考察

同じ**ストロングスタチン**であるピタバスタチンと比べて
ロスバスタチン、アトルバスタチンが多く処方されていました
ロスバスタチンの使用量が多い理由は、門前の脳外科の
クリニックでロスバスタチンの処方が多いからではないかと
考えました

アトルバスタチンの使用量が多い理由はアトルバスタチンが
含まれている配合剤の種類が多いからではないかと感じました

スタチン系が用いられる処方について、実習中に処方解析を行いました

その中から3例に注目し、治療目的やスタチン系の選択について考察しました

症例1

49歳女性(脳外科)

処方

アムロジピン5mg・アトルバスタチン5mg配合錠 1日1回朝食後 30日分

※前回Do処方

アムロジピン5mg・アトルバスタチン5mg配合錠

高血圧症治療薬であるアムロジピンと脂質異常症治療薬であるアトルバスタチンの合剤が処方されていることから、**生活習慣病の治療**を目的としていると思いました

この症例では、配合剤の使用による患者さんの服用のしやすさへの配慮を感じました

症例2

74歳女性(脳外科)

今回の処方

プラスグレル錠3.75mg	1日1回朝食後	42日分
ロスバスタチンカルシウム口腔内崩壊錠5mg		42日分
ラベプラゾールNa錠10mg		42日分

※前回アスピリン腸溶錠が処方されていた

症例2から考えたこと・推測したこと

- ・プラスグレル錠は、抗血栓薬として脳梗塞の再発予防のために処方されているのではないかとということ
- ・ロスバスタチンカルシウム口腔内崩壊錠は、動脈硬化の予防薬として脳梗塞の再発予防のために処方されているのではないかとということ
- ・ラベプラゾールNa錠は、前回のアスピリン錠の副作用予防のために処方されているのではないかとということ

症例3

67歳男性(循環内科)

心筋梗塞前の処方

クロピドグレル錠75mg

1日1回 朝食後

60日分

症例3

67歳男性(循環内科)

心筋梗塞後の処方

プラスグレル錠3.75mg

1日1回朝食後

65日分

ロスバスタチン錠5mg

65日分

フランドルテープ40mg

1日1回 1回1枚貼付

42日分

症例3から考えたこと・推測したこと

- ・プラスグレル錠は、抗血栓薬として心筋梗塞の再発予防のために処方されているのではないかということ
- ・ロスバスタチン錠は、心筋梗塞後にロスバスタチンが追加されていることから、心筋梗塞の再発予防効果を意図して処方されているのではないかということ
- ・フランドルテープは、硝酸薬として心筋梗塞の再発予防のために処方されているのではないかということ

処方解析から考察したこと

スタチン系の薬物治療では、患者さんの病態の段階に応じて、コレステロール値を下げて**動脈硬化を予防する**意図で使用する場合と、**脳梗塞・心筋梗塞の予防・再発予防**の意図で使用する場合があると考えました

脳梗塞・心筋梗塞の予防にロスバスタチンがよく用いられる理由として、ストロングスタチンの使用により**脂質管理目標値の達成を図ること**、他の医薬品との**相互作用が少ないこと**、水溶性スタチンであるため**肝代謝が少なく肝障害の頻度が低いこと**などが挙げられると考察しました

まとめ

ストロングスタチンはLDLコレステロール値を脂質管理目標値まで低下させることを目的とした治療において有効なスタチン系であり、特に**ロスバスタチン**は動脈硬化性疾患の予防において選択されやすい医薬品であると考えました

漫然と適応だけで医薬品を見るのではなく、**処方意図**を考えて**医薬品を見る**ことで患者さんにとって適切な薬物治療を行うことができるのだと思いました

参考文献

[動脈硬化性疾患予防ガイドライン 2022年版 : https://www.j-athero.org/jp/wp-content/uploads/publications/pdf/GL2022_s/jas_gl2022_3_230210.pdf](https://www.j-athero.org/jp/wp-content/uploads/publications/pdf/GL2022_s/jas_gl2022_3_230210.pdf)

https://www.jstage.jst.go.jp/article/shinzo/42/2/42_2_207/_pdf/-char/en

https://www.jstage.jst.go.jp/article/numa/73/2/73_81/_pdf

https://jsn.or.jp/journal/document/49_1/41-48.pdf

ご清聴ありがとうございました